

論文の書き方の一考察
『朝鮮／韓国ナショナリズムと「小国意識」』
を振り返る

神戸大学大学院国際協力研究科

木村 幹

話の前提

- 1986年学部入学 当初は司法試験希望
- (バブル景気、プラザ合意以後の円高)
- → 中学生時代の友人に刺激されて米国旅行
- (1987年春)
- → 帰りに訪問したメキシコで途上国の貧困に関心を持つ
- → 以後、バングラデシュ・インド(1988年春)、エジプト・ヨルダン・イスラエル(1989年春)と旅行

大学院進学へ

- 「日本国内問題よりも途上国の問題の方が深刻」と考え始める
- → 国連職員？大学教員？
- → どちらにせよ大学院進学必須
- 指導教員（木村雅昭[比較政治学]）と相談
- → 「研究者になりたいのか？」と言われ「研究」が視野に入る

1989年夏(4回生夏)

- 時あたかも冷戦崩壊まっただ中
- 大学院入学は既に確定済み
- 指導教員と「何を研究するか」を相談
- → 2択の選択肢を与えられる(地域か理論か)
- とりあえず夏休みに Geertzの著作を原文で読む
- → 結論は「面白くない」、やっぱり具体的な問題が良い
- → 再び相談へ

地域の選択

- 当初の提案は「イスラム地域研究」
- (旅行していて楽しかったし、研究者も少ないと考えた)
- → 指導教員から「語学はできるか？」とのご下問(「研究者は国際的に競争しなければならない」の意味)
- → 自分にできる事、そして、国際的に競争する際にアドバンテージを取れるところがどこか考える

消去法での朝鮮半島選択

- 欧米の大学にアドバンテージがある分野は国際的に厳しいという理解が生まれる
- → この時点でアフリカ、西アジア、南アジア、ラテンアメリカが消える
- 実際に現地で情報が取れるかどうか
- → 天安門事件さ中の中国が消える
- 楽しい環境で研究できるか
- → 京大内部の人間関係で東南アジアが消える
- 研究して生きていけそうか
- → 台湾が消える

選択の合理化

- 日本で研究する事のアドバンテージ
- 1) 資料が多い
- 2) オーディエンスが多い
- 3) 韓国語は習得が楽(勉強はじめてみた)
- 4) そもそも日本統治期の資料は日本語
- 5) 海外での研究は圧倒的に少ない
- 6) 韓国での実証研究は未だ発展中
- 7) 国内ではステレオタイプな議論ばかり
- 8) 経済発展と民主化で国内的にも国際的にも注目急上昇中
- 註:あくまで1980年代末期の話です

さて、どこから手を付けるか

- 関心のベースは近代化の成否
- → なぜに世界には近代化に成功した国としな
かった国があるのか
- ここからの考察
- 韓国には二つの経験がある
- 1) 19世紀後半の近代化の挫折(植民地化)
- 2) 20世紀前半の目覚ましい経済的・政治的近代
化
- → この二つを分けたものがわかれば何かがわ
かるかも？

漠然とした理論的枠組み

- A.トインビー『歴史の研究』
- (←学部の「政治思想史」で紹介された)
- そこにおける文明の伝播の枠組み
- 1)異なる文明の接触
- 2)被接触側における「ゼロット主義(排斥派)」と「ヘロデ主義(受容派)」の形成と対立
- 3)この中で一つの役割を果たす「軍人」
- 例・日本の武士、ロシアのデカブリスト

最初のプロジェクトとしての 大院君政権期研究

- という事は、まずは「ウェスタンインパクト期」の朝鮮王朝の対応を調べるべき
- (→先行研究が少ない事はすぐにわかる)
- 最初の焦点はその軍人の対応
- 漠然とした仮説
- 1) 軍人は「ヘロデ派」的に反応した
- 2) 軍人が「ゼロット派」的に反応した
- → 調べたら「ヘロデ派」的であることがわかった
- (これで研究の半分の目的は達成)

では何故文明開化に至らなかったのか？

- 当然の事ながら、朝鮮王朝での軍人の地位は低い(文人社会だから)
- かといって、まったく無視され、黙殺された訳ではなさそう
- そもそも文人側はどう反論したのか
- まともな議論があるとするれば、文人側でもウェスタンインパクトの深刻さをよく知っている人の間である筈
- → という事は、鍵は朝鮮王朝の開国／開化派にあるかも？
- → そしてこの部分は先行研究がある！

戦略

- 先行研究が分厚い分野はいきなり一次文献を読む必要はない。そもそも漢文なので間違える可能性が多いので危険すぎる。
- 従って、二次文献をまずは徹底的に読み込む。一次文献も二次文献に引用されているものをまずは読む。
- そして、二次文献に書かれている事に正面から反論せず、そこに「異なる含意」がある事を見つければ良い。

読み替え成功

- 朴珪壽(朝鮮王朝で最も有名な開国論者)
- 「今の世界の情勢は、東西の列強が対峙し、さながら春秋時代のように、互いに盟約を結び、絶えず戦争を繰り広げている。我が国は小国ではあるが、東洋の地理的重要地点に位置しており、晋と楚の間に位置した鄭と同じ立場にある。内政と外交に機を失わなければ、独立を保つことはさして困難ではない。逆にそうしなければ、亡国の憂き目を見ることになるだろう。今日、アメリカは地球上で最も公平な国であるという。その政治は巧みに問題を解決し、しかも世界の最富裕国であり、むやみやたらに他国を侵略しようという欲はない。仮令、アメリカが自ら我々と盟約を結ぶことを提案してこないとしても、我が国が率先してこれと固く盟約を結び、孤立を回避することがどうしていけないのだろうか。これこそ、目指すべき我が国の道である。」
- → 韓国の開国論が日本のそれとはまったく異なる論理を持っている事を確認(これでは「富国強兵」等にはつながらない)

説明する

- 1. 朴珪壽の開国論の特徴が自らを「小国」であるという前提でとらえている事は明らか
 - 1) 日本との違いを確認する
 - 2) この論理が孤立したものでないことを確認する
- 2. この違いがどこかから来たのかの理由を探す
- → 双方で参照される中国の位置づけが異なることが明らかになる

修論完成

- 1) ウェスタンインパクト後の朝鮮王朝内「ヘロデ派」の形成とその敗退
- 2) 変わって登場した開国論の特殊性の説明
- 3) 何故日韓の開国論が異なるかの説明
- → キャッチフレーズとして
- 「儒教的レッセフェール」「小国意識」

サブプロジェクト

- そもそも朝貢体制についてよく知らない
- → まとめてみた(「徳治の論理と法治の論理」)
- 就職したら理論についても論文書けと言われた
- → とりあえずゲルナー使ってナショナリズムについてまとめてみた
- (「産業社会における分業と政治」)

第二論文へ

- とはいえ、これだけで1910年までの過程を説明するのは当然無理
- 課題1：朝鮮王朝知識人の意識はその後どうなったのか
- → ここでその後も大規模な近代化が展開されていない事は明らかなので、「変わらなかっただろう」という見通しを持っている
- 課題2：朝鮮王朝知識人の意識を一定の所に固定したものは何か

当然続く時代へ

- 1882年に朝鮮王朝は西洋列強に開国しているなのでその後の状況を見れば良い
- 代表的な開化派の人間を選ぶ、できればやりつくされていない人が良い
- できればその後も有力者であり続ける人が良い(→金允植)

註:この辺りから一人の人間に焦点をあてて研究するというスタイルになっている

可能性

- 朝鮮王朝の知識人が自らの国を「小国」だと思っているのには、中国との関係以外にも何らかの理由があるのではないか
- 考えてみれば、朝鮮は日本の2／3程度の規模を持っているのに、どうして「小国」だと思っているのだろうか
- ここで学部の「比較政治学」で教えてもらった「軟性国家」(資源動員能力を欠いた国家)の話を出す

第二論文仮説形成

- 朝鮮王朝の知識人がその後も自国を「小国」だと思い続けたのは、国全体の経済規模ではなく、王朝の財政規模が小さかった事によるのではないか
- プロジェクト
- 1) 黙々と日中朝の財政規模を比較する方法を考える
- 2) 金允植の経歴を探る中でこの問題がどこで出てくるかを見つけてみる

ビンゴ！

- 財政規模計算：仮計算ながら朝鮮王朝の財政規模が江戸幕府より遥かに小さかった事がわかる
- 金允植の経歴：開国直後、清国の洋務運動を学びに行った彼が財政難に苦しみ、李鴻章等から「朝鮮には独自の近代化は無理だ」と諭され、国王にもその旨報告している事がわかる

江戸幕府

西暦	年号	年度	総歳入	米価	石高換算	t換算
1730	享保	15	798.8	0.609	1311	196
1843	天保	14	1543	1.086	1420	213
1844	弘化	1	2575	1.191	2162	324
1847		4	1561.7	1.151	1356	203
1848	嘉永	1	1442.7	1.077	1339	200
1849		2	1356.7	1.18	1149	172
1850		3	1442.7	1.229	1173	175
1851		4	1458.9	1.114	1309	196
1852		5	1793.7	1.151	1558	233
1853		6	1481	1.163	1273	190
1854	安政	1	2586.5	1.143	2262	339
1855		2	1718.1	1.114	1542	231
1856		3	2111	1.191	1772	265
1863	文久	3	5331	1.209	4409	661
年			千両	両／石	千石	千t

軍事費	t換算	軍事費／歳入
-----	-----	--------

469.763	58	8.8
千両	千t	%

明治政府										
西曆	年号	年度	歳入	米価	石高換算	t換算	陸軍費	海軍費	t換算	
1875	明治	8	69483	7.28	9544	1431	6959736	2825843	201	14
1876		9	59481	5.01	11872	1780	6904829	3424988	309	17.3
1877		10	52338	5.55	9430	1414	6137293	3167512	251	17.7
1878		11	62444	6.48	9636	1445	7266010	2820514	233	16.1
1879		12	62152	8.01	7759	1163	8757161	3138750	222	19.1
1880		13	63367	10.84	5845	876	8610921	3415770	166	18.9
1881		14	71490	11.2	6383	957	8691948	3285718	160	16.7
1882		15	73508	8.93	8231	1234	9201465	3439654	212	17.1
1883		16	83107	6.26	13275	1991	12202774	6096496	438	22
1884		17	76670	5.14	14916	2237	11160305	6878748	526	23.5
1885		18	62157	6.53	9518	1427	10189894	5334129	356	24.9
1886		19	85326	5.6	15236	2285	11633151	8890808	549	24
1887		20	88161	5	17632	2644	12419674	9818276	667	25.2
1888		21	92957	4.93	18855	2828	12976848	9809556	693	24.5
1889		22	96688	6	16114	2417	14125703	9323158	586	24.2
1890		23	106469	8.94	11909	1786	15533079	10159304	431	24.1
1891		24	103231	7.04	14663	2199	14180167	9501692	504	22.9
1892		25	101462	7.24	14014	2102	14635252	9133106	492	23.4
1893		26	113769	7.38	15415	2312	14721226	8100921	463	20
1894		27	98710	8.83	11178	1676	10408936	10253154	350	20.9
1895		28	118433	8.89	13322	1998	10015935	13520269	397	19.8
1896		29	187019	9.65	19380	2907	53242524	20005758	1138	39.1
1897		30	226390	11.98	18897	2834	60147988	50394534	1384	48.8
1898		31	220054	14.97	14699	2204	53897653	58529902	1126	51
1899		32	254255	9.99	25450	3817	52551198	61661610	1714	44.9
1900		33	295855	11.93	24799	3719	74838202	58274895	1673	44.9
1901		34	274395	12.22	22454	3368	58381708	43979328	1256	37.3
1902		35	297341	12.66	23486	3522	49442059	36326188	1016	28.8
1903		36	260221	14.42	18045	2706	46884562	36117857	863	31.8
1904		37	327467	13.22	24770	3715	12088510	20613219	371	9.9
年	年	千円	円/石	千石	千t	円	円	千t	%	

朝鮮王朝

西曆	年号	年度	歳入	米価	円元交換率	t換算
1895	高宗	32	1557			
1896		33	4809	4.61	1	104
1897		34	4191	5.32	1	78
1898		35	4527	7.04	1	64
1899		36	6473	5	1.16	111
1900		37	6162	5.27	1.27	92
1901		38	9079	5.03	1.4	128
1902		39	7586	6.19	1.78	68
1903		40	10766	6.78	1.88	84
1904		41	14214	6.91	1.98	103
年	国王	年	千元	円/百kg	元/円	千t

軍事費	t換算	軍事費/歳入
321		20.6
1028	22	21.3
979	18	23.3
1251	17	27.6
1447	24	22.3
1636	24	26.5
3594	51	39.5
2786	25	36.7
4123	32	38.2
5180	37	36.4
千元	千t	%

議論の大枠の形成

- つまりメカニズムは以下のようにになっている
- 1) 朝鮮王朝知識人は元々自国の潜在能力を小さく見ており、故に「上からの近代化」は困難であると考えていた
- 2) にも拘らず、時折、この状況に危機感を覚え独自の改革の必要性を訴える人々が生まれていた
- 3) しかし、彼らはその後、実際に改革に使える資源が少ないという壁にぶち当たり改革を断念するか、その資源を得るために外国の支援を求めるようになっていった

三つ目の課題

- とはいえこのメカニズムは、金允植単体のケースにみられたものに過ぎない
- 言い換えるなら、同様のメカニズムが韓国が最終的に併合されていく中で機能していなければならない
- → では、最終盤の韓国併合を韓国側で率いた人物はどのような考え方を持っていたか
- → 選択は2択、李完用か李容九
- → 先に見た「政府の利用可能資源」という意味では政府関係者の李完用が良いだろう、という選択

ここはあっさりと決着

- ようは李完用が韓国併合を合理化する際の説明に、「小国意識」が表れれば良い
- → 技術的に難しいのは「併合すれば国がなくなってしまう」ので小国も何もない事
- → でもここは資料さえ見つけられれば李完用自身が何かしらの説明をしている筈
- → 併合の最終過程で李完用が「国は守れないが、社稷(≡王室)は併合で守ることができる」という説明をしている事で解決

4つ目の課題

- そろそろくどくなっているのだが、日本統治期についても何か書かないといけない、と考える

註：当時は李承晩で終わりにするためにもう一本必要だと考えている

→ 韓国の民族主義が沈滞して行く過程においても「小国意識」がみられるかも知れない

→ 「民族改造運動」の主唱者である李光洙を取り上げる

→ あっという間に完成する

註：この研究は後に金性洙研究から、『韓国における「権威主義的」体制の成立』（2冊目の専門書）に発展する

失われたプロジェクト

- ある段階までは、朴珪壽→金允植→李完用(→李承晩)という開化派の系列のプロジェクトとして完成させようとしている(つまり、韓国の開化派のイデオロギーの特殊性、という形の研究と考えていた)
- で、日本統治期のターゲットとしては、朴泳孝(急進開化派、朝鮮殖産銀行理事)を考えていた
- が、本人が書いた事、言った事が少なすぎて、その「思想」を立証できず、お蔵入りになった

いよいよおしまい

- そもそもこの研究は、韓国における19世紀後半の近代化の失敗と、20世紀後半の近代化の成功を説明するためのもの
 - 20世紀後半の韓国の経済発展が外資導入によることは明らか
 - さらにこの外資導入のきっかけを作ったのが李承晩政権による大量の援助受け入れだったことは既に知っている
- (というより当時はやっていた研究だった)

終わりを考える

- とにかく李承晩が外資や援助を受け入れたらこのプロジェクトはおしまい
- 鍵は李承晩がどうやって外資や援助の受け入れを正当化するか
- 李承晩がアメリカに対して常に高飛車であったことは知っている
- それはひょっとすると現在の韓国にも通じるかもしれない

いろいろ考えた

- できれば李承晩にも「小国意識」を持っていてほしい（なぜならばそうでないと、「小国意識を持っていない人々」がメインストリームになってしまい、論文が崩壊する）
- とすると、小国意識を持ちながら、それを使って外資や援助の受け入れを正当化する、という事になる
- 「韓国は小国だからこそ、列強の援助を受ける権利がある」というロジックになる筈
- （これを見つければいいし、見つかる筈）

見つかりました

- 「韓国民は国を自律できないからこそ、アメリカに仲裁権を依頼したのであって、アメリカが韓国のためにどういことをしようとするのは無駄なことだという論法には何等の根拠もないのだ。もし韓国が自らを完全に防衛できるならば、かれらはアメリカなりあるいはその他の国家に一体何のために援助を請うたであろうか。友好的な援助を最も必要とする場合は、我々人間にとってどういう場合だろうか。自分が敵よりもっと強い場合に必要とするとしてもいいのか」

李承晩『私の日本観』中村慶守訳(産業貿易新聞社、一九五六年)二二七頁より。

今から思えば・・・

- 行き当たりばったり
- 重要ケースを扱うことでストーリーは確保できたが、恣意的と言われてもやむを得ないかも
- 執筆に大学院入学から6年もかかった
- 最初から「落としどころ」がわかっていたのはよかった
- 二次文献はうまく使えたと思う
- 一つ一つの論文で橋頭堡を作る形で書けたのはラッキーだった
- 歴史的背景から思想形成過程を追い、鍵になる引用を探す、という方法は一貫している

その後の研究につながったもの

- 理論パートはやはりまとめて書いた方がわかりやすい。
- もっと最初から計画的に書けばもっとスムーズだったはず。
- 個人を対象にして思想形成過程をその思想の役割を追うことにより、当時の時代状況と思想的(文化的)環境を再現する、という方法は定番に。